

されてきた放射線障害に関する知識を大会中に披露して、被災地および被災された方々へのお見舞いの気持ちを表すことにした。

集まった演題数は、一般演題 356 題、シンポジウム・ワークショップ 59 題、講演 9 題、計 424 題であった。参加者数は、有料入場者 792 名（一般 694 名、研修医 4 名、学生等 94 名）で、招待者を含めると約 900 名であった。

大会のテーマは、“医学教育—その理論と実践”とし、教育学の歴史と理論、医学教育の先人達の活躍をふりかえりつつ、最新の知見に基づく医学

教育の進歩を示すこととし、大会長講演に加えて、Noel オレゴン大学教授、二宮皓放送大学副学長、故堀原一日本医学教育学会名誉会員、韓国医学教育学会 Han 教授、日野原重明名誉会長から招請講演をいただいた。今回の特筆すべきシンポジウムは、“医学教育のグローバルスタンダード”であり、ECFMG の Dr.Cassimatis、AMEE 会長 Dr.Patricio、韓国医学教育学会会長 Dr.Ahn から提言を受けた。このことは今後の日本の医学教育の議論の土台になると思われる。

3. 第 44 回 日本医学教育学会大会

平形 道人（慶應義塾大学医学部医学教育統轄センター）

第 44 回大会は、2012 年 7 月 27 日・28 日、慶應義塾大学（大会長、末松誠医学部長）の主管により、慶應義塾大学日吉キャンパス協生館・来往舎において開催された。第 1 回大会（実行委員長：牛場大蔵）以来、44 年ぶりの本学での主催となった。大会の基調テーマは、自らの責任と判断の下に医療を実践できる医療人の育成が強く求められ、医学教育の重要性が一層高まっている今こそ、福澤諭吉が説いた「一身独立して、一国独立する（『学問のすゝめ』より）」に基づき、「一身独立の若手医療人育成を目指して」とした。

主な発表演題を以下に記す。

大会長講演：末松誠大会長「一身独立の若手医療人育成を目指して」。

招請講演 3 題：Ronald M. Harden 先生（ヨーロッパ医学教育学会）「The Challenge of Medical Education in the 21st Century and the Dragonfly Effect」、北里一郎先生（学校法人北里研究所）「日本における近代医学の原点を辿る—福澤諭吉と北里柴三郎—」、R. Harsha Rao 先生（Pittsburgh 大学）「Learning to Teach and Teaching to Learn: A Personal Approach to Interactive

Education」

教育講演：菅野武先生（東北大学）「苦難の時こそ、医療者としての思いが現れる—公立志津川病院での東日本大震災の体験を通して—」

市民公開講演：日野原重明先生（名誉会長）「100 歳の長寿から学んだ私の言葉」

日韓医学教育学会交流招請講演：Young Hwan Lee 先生（Yeungnam 大学）「Clinical Skills Examination in the Korean Medical Licensing Examination」

受賞者講演：牛場賞—戸倉康之先生（丸山記念総合病院）、日野原賞—吉岡俊正先生（東京女子医科大学）、懸田賞—西城卓也先生（岐阜大学）

そして、シンポジウム 20 題、パネルディスカッション 19 題、一般演題 413 題（口演 205 題、ポスター 198 題、インターナショナル・セッション 10 題）、計 459 題の発表とプレコンgress ワークショップ「実践的学習方略のあり方」、「国際雑誌でアクセプトされる医学教育研究論文とは」が行われた。

以上の他、特別セッション：「卒前・卒後医学教育における超高精細 3D 画像のコミュニケー